

チリパタゴニアのパイネ国立公園は、旅人の多くが話題にするが、私にとっては今一つだった。草原も動物も、洞窟も滝もどこかで見た事があるような気がした。そして何より、世界中の人が最もあこがれる山の1つであるパイネそのものが、国立公園に行きつく前に、車からあっさり見えてしまった事が、この「イマイチだぜ」という気持ちに一役買ってしまった。せっかく日本から40時間かかるこのパタゴニアだが、期待外れに終わりそうだった(ああ、やっぱり高くてもイースター島へ行けばよかったなあ)。

そんな気持ちで、チリ/パタゴニアのプンタアレナスからアルゼンチン/パタゴニアのカラファテへ行くバスに乗り込む。

目指すはロス・グラシアレス国立公園内にあるペリト・モレノ大氷河である。

カラファテへ

9時丁度にプンタアレナスを出発したバスは10時に国境へ着いた。

ガイドブックには、チリ側とアルゼンチン側のイミグレーションは、合わせて一発で終わり、と言う風を書いてあった気がするのだが、ばっちりそれぞれ行う様だ。

しかもヨーロッパと違い、イミグレのオフィサーがバスに乗り込んでスタンプを押すことはなかった。それぞれがバスを降りて、小さいイミグレの建物に出向かなければならない。

乗ってきたのは大型バスだから40人以上の人間が一気に並ぶ。そうすると、後ろの方は吹きさらしの屋外に立つことになる。これはチリもアルゼンチン側も同じ。気温は10数度くらいだが、パタゴニアの強風の為に体感温度はむちゃくちゃ低い。

全く駄目な両国だ、と思ってしまう。パタゴニアは、観光客でもっているような場所なのに、金を落とす観光客が震えながら並ばされている。先日行ったオーストラリアでも、入国・出国共に30分以上並ばされて腹が立ったが、それ以上にひどい国があったのだった。

並んでいる時に観光客に聞いてみると、どうもチリとアルゼンチンは仲が悪いらしい。イミグレ同士が1キロ以上も離れているのはその辺りに理由が有りそうだ。

そして、何千キロにも渡る国境間では、国際的な誘拐なども数多く起きていると。確かにイミグレのオフィスには、数々の子供の写真が掲載されている。誘拐された子供たちの様だった。

結局、2つのイミグレ通過に80分も浪費した。

途中の道は、まったくの荒野である。

ゴロゴロとした石、枯れた草。ここもモンゴル草原にとっても似ているのだった。

小学校の頃に習ったステップとパンパの違いって何だろうなどと考えながらぼんやり車窓からの眺めを楽しむ。途中、所々にある川の両岸だけは豊かな緑に覆われている。やはり水がないから木が育たないのか？しかしパタゴニアはたっぷり雨は降るだろうに。



イミグレで時間を食ったので、予定よりも少し遅れてアルゼンチンの地方都市であるカラファテに到着。

何だか、首都のみならず田舎同士を比較しても、やはりアルゼンチンの方が洗練されていてかつ躍動的な気がする。おまけに物価が安い。

お土産屋さん、インターネットカフェ、登山用具店など豊富な街であった。チリ側の地方都市であるプンタアレナスではこうはいかない。

早速、旅行代理店に行き、ロス・グラシアレス国立公園内の、ペリト・モレノという大氷河へ行くツアーに申し込む。出発は翌日だ。

ペリト・モレノ氷河へ

最初は舗装された道だったが、そのうちガタガタ道へ。2時間ほど走ると、遠くに氷河が現れた。絶景である。

この近くにはホテルも別荘もあるようだ。やはり氷河を眺めて休養を取るってのは良いアイデアだ。富士山を眺めるような、何ともゆったりした気分になるのだろう。

バスはさらに氷河へ近づく道を走る。そして氷河がとけ出して形成された大きな湖の棧橋へ。そこには船が三隻待機していた。中型のボートにのり、一路氷河へ。だんだんと氷河が近づいてくる。



パタゴニアは天気が悪い場所で、こうして飛行機から氷河が見られるのはそれほど多くないらしい。ラッキー！

遠くからでは、「ああ、氷の固まりって、青くてきれいだなあ」ぐらいに感じていた。この日は天候にも恵まれていたので、空の青に加え、氷河も青みを帯びているのである。

ただ、大学の頃に私は、網走からさらに先へ行ったサロマ湖に行った事があり、そこで既に流氷なるものは見た経験があるのだ。そんな私には、この程度の景色では、その再現という程度に過ぎなかった。当時その流氷を見た当時はものすごく感動した。氷河と流氷の違いはあるが、二度目に近い今回はそれほどの驚きはない……。パイネの二の舞いか、またしても、という思いがよぎる

しかし、しかし、船が氷河の100メートルまで近づいて、体に電流が走るような感激が再び湧いてきた。

【でかい】

のである。

網走の流氷は高さ3メートルくらいであるが、ここの氷の固まりは30~60メートルもある。船からだと遥かに見上げる高さだ。

空はどこまでも青く、そしてその色を反映して氷河も水色に染まっている。所々にある割れ目は光を深く吸収して完全にブルーだ。

遠くの方で、砲撃の様な音が聞こえる。思ったより頻繁に崩壊しているようだ。船には40名ほどの客がいるが、誰もがもう興奮状態で写真を取りまくっている。

岩場を利用した栈橋で船をおり、一堂は氷河の方へ足を進める。

現在、地球温暖化の為、世界中の氷河が後退しているそうだ。ところがこのペリト・モレノだけはその位置が変わらないという珍しい氷河らしい。

そして、さらに珍しいのが、この氷河の動きがダイナミックなこと。ガイドブックには、「この氷河は、何万年も掛かってようやく、崩壊と共にその一生を終える」みたいな事が書かれているが、それは嘘で、目の前にある氷河は19世紀にできたものらしい。チリとアルゼンチンの国境の山々で雪が降り、圧雪されて、新しく氷河が出来ては少しずつ移動し(というか、氷河的には足早に移動し)、湖へ達し崩壊していく、というサイクルがとても速いのだった。だからこそ、氷河崩壊見物が可能なのだろう。

船着き場から氷河までは15分ほどの散策となる。その間にも遠くの方で、「ガガーン」という崩落の音が続く。その音だけは、まるで、映画でみた戦場にそっくりだ。

静かになったと思うと、「キュルルルー」という氷と氷が圧せられる音が聞こえる。あたかも、イルカが遠くで鳴いているかのようだ。

とその時、我々から比較的近いところでも、50トンほどの氷河が崩れ落ちた。

「バーン」という大音響と共に、周囲の山々にこだまし、さらに次の崩落を誘発している。その地鳴りの様な音は15秒も続いた。

そして崩落した場所を起点とする波が、砂浜をあるいている我々の方に近づいてくる。

ガイドさんに言わせると、今の崩壊は「まあまあの規模。中くらい」という。崩落現場から500メートル離れた岸への波は30cmくらい。今まで氷河の姿を映すほど静かだった湖が、急にざわつき始め海の様になる。

大きな崩落で発生する波により転覆する恐れがあるので、氷河見物の船は100メートル以内には近づかない事になっているそうだ。なるほどうなずける。

湖の水は、くすんだエメラルドグリーンだ。氷河が大地を削り、小さな粒となって湖に注ぐ為、水はやや濁るという事だった。氷河そのものは、限りなく透明だけどね、とガイドさん。

氷河を歩こう

このツアーの目玉は、氷河トレッキングなのだった。氷河トレッキングなるものがあるのは、パタゴニアに来て初めて知った。

各自、ガイドさんたちにアイゼンをはかせてもらう。

ツアー客のほとんどはスペイン人たちで、アイゼンが珍しいらしく、氷河をバックに足元を撮影

していた。

私も冬山には行った事がないので、アイゼンは初めての経験だ。

鉄で出来ているので当たり前だが結構重い(馬鹿の大足の影響で本当に重い)。

付けてみると、確かに氷河にざっくり入り、踏みしめる事が可能である。



妙にガイドが多いな、と思っていたら、全ての客にアイゼンをはかせてあげる為だった。

ガイドにアイゼンによる氷河の歩き方を教わり、15人ぐらいのグループに分かれて氷河を歩き始める。

快晴、無風。気温は10弱といったところ。

これほどの天気はめったに無いそうだ。

このツアーは強風でも雨でも行ुरらしい。時期は10月から5月くらいまで。その中で、これほどまでに晴れるというのは、多い年でも50日もないという。

そしてパタゴニアの場合、晴れていても、大抵はものすごい強風が吹いている。風が無ければ雨が降っている。

今日のように晴れていて風が無いというのは、とても珍しい事らしい。

氷河ってのは、『かき氷』のお化けみたいなものだった。

正確に言うと、かき氷よりは粒が大きい。

ファーストフードのドリンクに入っている様な、1センチ大の氷の結晶が無数に集まって氷河を作っているのだった。

いろいろな場所に行くたびに、

『来てみなければわからない』

といつも思うのだが、この氷河にしてもそうだ。マクロな“氷河”の存在はテレビなどで見聞きしていても、その氷河のミクロな部分というのは意識した事も無かった。



様々な形を呈した1センチ大の氷の結晶がどこまでも続く。1つぶ1つぶは透明だが、集まるとブルーを帯びてくる。

氷の結晶は、限りなく透明だ。そしてその味はとてもクリアである。

氷河というのは、実に多彩であった。穴あり、クラックあり、水溜まりや川、滝、山や谷まであるのだった。

さらには、表面には何も無いのに、足元付近には水が脈々と流れる音が聞こえる。これを地下水脈というのかどうか知らないが、氷河の中には確実に小川があるのだった。

そしてゴウゴウと水が落ちる音がする。今度は氷河の上の滝である。

そして池というほどではないが、所々に水溜まりがある。

水溜まりはどこまでも深い。そして青い。理論的には空の青さを反射している訳だが、空よりも青いのだった。



15人ほどのグループは、1列になって進む。さすがにロープは持たないが、踏み外すとたいへんな事になる場所も多い。



氷河上に道はない。急斜面を登る時には、ガイドがピッケルで階段を作る。



気温が高いせいか、氷河の上に大穴があいている事がある。またそこへ向かって川が流れ、滝の様になっている事も。



所々にクラックが走っている。こんなところに落ちると、多分助からない。

一時間ほど氷河トレッキングを楽しんだらうか。

足元は零度以下の氷だが、無風で天気がよいので、これならTシャツでも大丈夫である。防寒着では汗ばむくらいだ。

喉が渴いた。

氷河トレッキングの終点に、何と氷河の上にテーブルがあり、たくさんのグラスが並んでいる。ガイドはピッケルで氷河を削り、グラスにガシガシヤと入れ、ウイスキーをついた。

なかなか心憎い演出である。



氷河をぎっしりグラスに入れ、ウイスキーを注ぐ。太陽にかざすと、小麦色が映える。

ツアー一行が乾杯し記念撮影をしていると、ガイドは一人で再び氷河を登り始めた。どこまでも登っていき、ついに切りだった氷河の固まりにたどり着く。

何と彼はアイゼンとピッケルだけで、その固まりに飛びつき、さらに絶壁の氷河を登っていく。トレッキング時の雑談で彼は言っていた。「俺は登山のガイドはしない。あんなたいへんな事はやってられないよ。のんびりマイペースさ」などと軽口を叩いていたのに、今は落ちたら死ぬような断崖を登っている。しかもそれは氷の固まりなのだ。そしてあっという間に彼は山頂に達してしまった。



ガイドが見せてくれたパフォーマンス。アイゼンとピッケルだけで氷河を登り始めついに山頂まで行ってしまった。

これは、ウィスキーを飲んで氷河を堪能している我々へのガイドの粋なパフォーマンスだったのだ。一堂、拍手と共にさらにウィスキーが進んでしまう。

氷河の崩落展望台

ツアー一行様は、氷河トレッキングを終え、氷河の崩落がよく見えるという展望台へ移動する。

船による湖面上から見上げる氷河や、トレッキングで踏みしめる氷河も良いが、高い場所から見る氷河もこれはこれで素敵だ。



何十キロも続く氷河。目には見えないが、少しずつ氷河は動いている。この先の山はチリ領内である。

この展望台には、展望ポイントが5つもあって、観光客はそれぞれのポイントで、その崩落の瞬間を待っている。

もちろん不定期だが、おおざっぱに言うと5分くらいの間隔で大音響と共に崩壊している。崩壊すると、湖には砕かれた氷が無数に浮かぶ。

実は、その大音響は、湖に浮かんだ氷と、崩落する氷がぶつかる音だった。たった1メートル程度の氷の固まりでも、20メートルほどの落差から落ち、浮かんでいる氷にぶつかると、大砲のような号音がし、周囲にこだまするのだった。

一方、大きな固まりでも、湖に氷が浮かんで無いと、それほど大きな音はしない。プールの飛び込みの様に、ザザーンという感じ。

ただ、その波が湖岸に到着すると、ザブンザブンと波の音がざわつく。

崩落シーンを、まだ崩れていない最初の段階から見るのはとても難しい。この辺りだろうと1点に集中して見ているのだが、マーフィーの法則的に、その近くの、でも確実に視界からは外れているところが崩壊するのが常だ。

そして結果として、もうはるかに崩れ落ちてしまって湖に沈む寸前シーンを見る事になる。

しかし、だんだんと要領が分かってきた。

~ 氷河崩落を見るコツ初級編 ~

回りの観光客に注意

観光客の誰かが、声にならない声を上げたら...

氷河を見る

~ 氷河崩落を見るコツ中級編 ~

視線は遠くに合わせ、視野を広く取る

どこかが動いたら焦点を合わせて...

氷河を見る

~ 氷河崩落を見るコツ上級編 ~

音に注意

氷河は、崩壊する前に、微妙ながらキュルキュルーという氷の圧せられた音を出す。どこから聞こえているのかは難しいところだが、耳を澄ませば、大体のポイントが分かる。これは崩壊5分前くらいから起きている。

割れ目に注意

割れ目に注目する。無数にあるが、その割れ目の間隔をおぼえておく。あれ、これ、さっきよりも微妙に広がった気がする、と思ったらそこがポイントである(でも本当に微妙だけど)。これが崩壊2分前

小さな崩落に注意

大きな崩壊の寸前に小さな固まりが2つ3つ崩れ落ちる事が多い様だ。これが崩壊10秒前。ここでカメラのスイッチを入れて...

氷河を見る

私の場合、上級編を完全にマスターした。

で、これが崩落シーン。



この氷河崩壊は見ていて全く飽きないんだなー。

ツアーであるがゆえに、たった1時間しか時間を割いていないが、1日中ここにいたいぐらいだった。死ぬまでにもう一度来たいと思う貴重な場所だった。

このアルゼンチンパタゴニアのロス・グラシアレスとチリパタゴニアのパイネとを比較すると、私の場合、もう断然にこちらの方だ。9対1って感じた。確かに天候にも恵まれたが、ここでは自然の躍動感の凄さを感じる。

一方、ある友人によると、パイネの方が良いという。あの景色は何物にも換えられないと。人の感じ方は本当にいろいろだなと感じた。

大満足してカラファテに帰ってきた。醤油を持っていつも行くステーキ屋さんへ。

店員は私をおぼえていて、

「ビーフデチョリソね」という。何となく嬉しい。

でかいステーキと、970ミリリットルのビールで、大自然に乾杯！

次の国へつづく